RYOKO SUGAYA PIANO RECITAL

管谷怜子
ピアノリサイタル

ホロヴィッツの愛器
カーネギーホール
への凱旋
プロジェクト始動

2026年
7.15
19:00開演（水）
18:30開場

プログラム

星条旗（アメリカ国歌）
君が代（日本国歌）
J.S.バッハ：トッカータニ長調BWV912
W.A.モーツァルト：ピアノソナタ第10番ハ長調K330
F.ショパン：24の前奏曲 作品28より 第1, 4, 7, 8, 10, 17, 23, 24番
ー休憩ー
L.W.ベートーヴェン：ピアノソナタ第14番 嬰ヘ短調 作品27-2「月光」
ピアノソナタ第23番ヘ短調 作品57「熱情」

浜離宮朝日音楽ホール
（東京都中央区築地5-3-2）

公式HP　Teket　クレジット決済

全席自由席：5,000円

【お問合せ】☎090-9604-1663
ryokosugayahidokei@gmail.com

管谷怜子の弾くNY STEINWAYヴィンテージ

その名はCD75。1912年6月19日生まれ。製造番号 #156975。
「伝説のピアニスト、ウラディミール・ホロヴィッツが最も愛したピアノ――」
巨匠が無二の信頼を寄せた調律師フランツ・モアの証言である。
1983年ホロヴィッツの初来日コンサートでも使用された。

ところがこの日――。
体調不良のホロヴィッツは大量の風邪薬を処方され、指が麻痺した状態で舞台に上がった。
生涯最悪のコンサートとなってしまう。
巨匠が至高の名器CD75に触れる事は、以後二度となかった……

それが今、東京にある。
所有者は高木裕さん。高木さんはモアに師事した日本を代表する調律師だが、
ピアノプロデューサーとして、多くの歴史的名器を手許に置いてピアニストに貸与している。
CD75は、そうした名器の頂点なのだ。

CD75をホロヴィッツとスタインウェイの本拠地、ニューヨークのカーネギーホールに凱旋させる事。
それこそがCD75の悲願であり、管谷の描く夢の架け橋だ。管谷自身の世界への飛翔も、そこから始まる――。
その物語が今日、始動する。

管谷怜子讃ー各界の声、声、声

♥「熱情」は希代の名演と断言できるものではないか。あらゆる瞬間が確信に満ちた理解に立ち、神経質な感じが微塵もなく、しかし前作のリストで聞かせたあの細かな美音と、一瞬たりとも崩れることのない見事な和声の維持がここでも実現されている。そして何より今まで全く聞いたことのない独創的な解釈が迫り、聞こうと思わなくても引き摺り込まれる圧倒的な説得力。（長谷川 健 京都大学教授）

♥管谷怜子は、緩徐楽章が弾ける人なのである。これがとてつもなく難しいことだということを、意外に人は、というか音楽に携わるプロたちがどうやら分かっていないようなのだ。
（山根浩也　音楽評論家）

♥かのバックハウスやエリー・ナイに喧嘩を売るどころか、その巨匠らを背負い投げするような強烈なベートーヴェンだった。
（N・Sさん）

♥打鍵が最強で、時間を超越したアゴーギク、
空間を超越したデュナーミク。（N・Kさん）

♥琥珀の伽藍で聴くベートーヴェンだな、あれは！
（S・Nさん）

♥初めて管谷怜子の演奏を聴いた時の衝撃が忘れられないでいる。圧倒的な技術に支えられて奏でられる芳醇な音楽。この奇跡のようなピアニストをこのままにしていてはいけないと今多くの人が立ち上がっている。
（Y・Dさん）

♥彼女のピアニズムは現代のどんなピアニストのそれとも全くちがう。その演奏は拍節ごとに呼吸し、光が差したり沈黙したり、濃密な暗闇に聴き手を閉じ込めたり、そうして優しい歌から交響曲のような壮大な構築までを、和声に裏付けられた自由なテンポと圧倒的なテクニックで駆け抜ける。
（小川榮太郎 文藝評論家）

管谷怜子　Ryoko Sugaya

【プロフィール】福岡市出身。世界的ピアニストである故野島稔氏に師事し桐朋学園大学大学院修了。慶應義塾大学文学部（美学美術史学専攻）卒業。ウィーン音楽コンクール特別賞受賞。2007年FFGホールにてソロデビュー。各地でソロリサイタルを開催しつつ、ウィーン・ラズモフスキー弦楽四重奏団、九州交響楽団と共演。2012年から2024年まで取り組んだJ.S.バッハ鍵盤楽器作品の全曲連続演奏会は、音楽家としての揺るぎない信念を示す壮大な試みとして注目される。2022年までピアノ教室と九州大学で後進の指導に当たっていたが、現在は演奏活動に専念。2023年福岡で管谷怜子後援会「日時計の丘」が発足。2024年40代でCDデビュー。二つのCDアルバムが「ANAクラシックチャンネル」でアンエアされる。2025年よりベートーヴェン没後200年の2027年に向けて「ベートーヴェン巡礼2027：ピアノソナタチクルス(全32曲)」連続演奏会に取り組んでいる。音楽と真摯に向き合う姿勢に共感する熱烈なファンが増え続けている。